
ぼきり

来戸 述

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ぼきり

【Nコード】

N7786T

【作者名】

来戸 述

【あらすじ】

似ているようで似てない二人。必ず自分の一歩先を行く克也に、健吾は次第に嫉妬していく??。
お題「非常口」「眼鏡」「爪楊枝」

携帯の着信を確認しつつ席を立った克也を健吾はできうる限りの笑顔でもって送り出した。

市内の国立大学からほど近いファミレスで、二人はいつものように遅めの昼食をとっているところだった。

克也と健吾は大学で同じサークルに入っている友人。ということに表向きはなっている。いや、それとも共通の高校から同一の大学に進学した同級生だろうか。もしくはひとつのバイト先で働いている同僚か。

プラスチックグラスに注がれた氷水に口をつけ、健吾は横目でちらりと克也の方に視線をやった。

席を立った克也はファミレスの隅にある非常口の緑色灯の下で、折り畳み式の携帯電話を耳に当て、なにやら楽しそうに誰かと会話しているところだった。

そんな克也の様子を見て、健吾の胸に黒々とした感情が生まれてくる。

……自分と克也、いったい何が違うというんだ。

常日頃から、健吾には思っていたことがあった。

学校、趣味、背丈、そして好みの異性のタイプ。健吾と克也の人生は、奇妙に偶然にしつこいくらいに一致していた。

であるにも拘わらず、克也と健吾に対する運命の女神の微笑み方はというと、極端なまでに正反対だったのだ。

テニス部の大会で克也が優勝しているとき、健吾はいつも予選敗退だった。克也が定期試験で順位表に名を連ねたとき、健吾は赤点ギリギリを取っていた。常に克也が優で、健吾が劣。それは周囲からの目も変わらなかった。

何が違うというのか。

いつも克也だけが周りからちやほやされるのを見て、健吾は例え

ようもない嫉妬と、絶望と、虚無感を味わっていた。

克也はこれでもかというほど健吾についてきて、必ず一步その前に行く。名声も賞賛も栄誉も、すべて克也が奪い去ってしまう。健吾に残されたものは、せいぜい克也の腰巾着という立場くらいだろ
う。

事實は違う。毎回、毎度、四六時中、健吾が克也よりも前にいるのだ。今度こそ克也に先んじてやろう。そんな決意を密かに胸に秘め、精一杯の努力をしているのだ。

だが、のろまなカメがいくら全力疾走をしようと、それこそ脱兎のごとく駆けてくるウサギが僅差で後方にいたのでは勝ちようがない。十八年の人生の中で、健吾は克也に勝てた試しがなかった。

電話を終えた克也が意気揚々と向かいの席に戻ってくる。健吾はむしゃくしゃする心を落ち着かせようと、再び氷水を飲み下した。

冷水が嫉妬の炎を消し去ることはなかったが、少なくともその嫉妬で歪んだ健吾の表情を隠すことには役立つ。

向かい合って座る克也と健吾にある外見上の違いといえば、それこそ眼鏡の有無くらいしかない。他人であるのに、なぜか似た風貌を漂わせる二人なのだ。とはいえ、克也が健吾を間違えられることもなければ、健吾が克也と誤解されることもないのだが。

眼鏡。以前に克也が言った言葉を思い出す。

眼鏡をしていると、彼女とキスをするときに邪魔なのだそうだ。

お前も外せよと言われたが、生憎と健吾に眼鏡が邪魔になるような機会など訪れたことはないし、眼鏡をかけていることが唯一自分と克也を隔てる壁のような気がして、健吾はコンタクトに変えるという選択肢を取らないでいたのだった。

自分と克也の差異など、探そうと思えばいくらでも見つかるにも拘わらず。ただ、自ら主体的に選び取った違いが欲しかったのだ
た。

すでに喉を潤す水はなく、健吾はテーブルの端から爪楊枝を抜き取った。

特に使うあてもなく、指先でぽきりとそれを折る。細い爪楊枝はいとも簡単に真っ二つに折れた。

これで、この爪楊枝は世界で一本だけの存在だ。

何十本とある爪楊枝の束から、たった一本の爪楊枝を見分けることなど、健吾にはできない。しかし、こうして折ってしまえば、他の爪楊枝からこの一本を見つけることなどたやすい。

折ってしまえば。真っ直ぐなままで区別することなどできないから、折ってしまえばいい。

いくら愚直に頑張ろうと、いくら必死に足掻こうと、いくら無我夢中で努力しようと、真っ直ぐである限り自分の個性は発見されない。と健吾は心の底から思い始めていた。

ぽきり。と軽い音がした。

視線を戻すと、眼前で克也が爪楊枝を一本折っていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7786t/>

ぼきり

2011年10月9日00時28分発行